特別号

琉球新報
THE RYUKYU SHIMPO

2020年(令和2年)
6月23日（火）
発行所 琉球新報社
郵便番号 〒900－8525
那覇市泉崎1－10－3
©琉球新報社2020年

不戦の誓い 次代へ

沖縄全戦没者追悼式で、黙とうする参列者＝23日正午、糸満市摩文仁の平和祈念公園

沖縄戦75年 慰霊の日

コロナ影響 追悼式縮小

沖縄は23日、沖縄戦から75年の節目となる「慰霊の日」を迎えた。最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園では同日、沖縄全戦没者追悼式が執り行われた。ことしは新型コロナウイルスの感染対策で規模を縮小し、招待者２００人程度が参列した。住民を巻き込んだ悲惨な地上戦で犠牲になった20万人余の戦没者を追悼し、恒久平和を願った。平和祈念公園には早朝から多くの人が訪れ、亡くなった家族に思いを寄せ、平和の礎に手を合わせた。

追悼式では玉城デニー知事が平和宣言を読み上げ「戦争を風化させないための道のりを真摯（しんし）に探り、世界の人々と手を取り合い、この島が平和交流の拠点となるべく全身全霊で取り組んでいく」と決意を表明した。米軍普天間飛行場の名護市辺野古への移設に伴う新基地建設問題に触れ、豊かな自然を次代に残すため「今を生きる我々世代が未来を見据え、責任を持って考えることが重要だ」と訴えた。

ことしは初めて、国連軍縮担当上級代表の中満泉事務次長、原爆の被害を受けた広島市の松井一実市長と長崎市の田上富久市長がビデオメッセージを寄せる。安倍晋三首相と関係閣僚らは参列せず、首相がビデオメッセージを寄せる。

▶詳細はあすの紙面をお読みください
▶ryukyushimpo.jp
▶購読のお申し込みは フリーダイヤル 0120－395069

鎮魂の祈り 島包む

戦禍 風化させぬ

沖縄戦75年 慰霊の日

20万人を超える命を奪った沖縄戦から75年の節目となった23日の「慰霊の日」。戦争体験者の高齢化はさらに進み、記憶の継承は喫緊の課題となっている。だが、新型コロナウイルスの影響で沖縄全戦没者追悼式は大幅に規模を縮小、各地の慰霊祭も中止や縮小に追い込まれた。それでも戦争体験者や遺族らは、各地の慰霊碑を訪れ、自宅で待つ「家族の分も」と、より長く手を合わせた。島は鎮魂と平和の祈りに包まれた。

県内の慰霊塔で戦後最も早く建立され、身元不明の遺骨を収めていた糸満市米須の「魂魄の塔」には早朝から多くの人が訪れた。午前中に一時、強い雨に見舞われたが、訪れた人々は静かに手を合わせ、犠牲になった家族に思いを寄せた。

大城昌清さん（78）＝南城市＝は亡くなった父とおばのため、毎年訪れている。海軍に所属していた父は避難していた壕の近くで爆撃に遭い犠牲になった。当時は幼かったため「お母さんが教えてくれた」と言葉を詰まらせ、花を手向けた。

糸満市摩文仁の平和祈念公園。国籍や人種、敵、味方を問わず、沖縄戦などで亡くなった人々の名前が刻まれた平和の礎は設置から25年となり、刻銘者は24万1593人に達した。

父方の祖父や母方の祖母らの名前が刻まれている徳元加代子さん（61）＝豊見城市＝は子ども3人と孫1人の5人で訪れた。戦後75年の節目に「ウチナーンチュとして当たり前のように継承していきたい」と孫の上原陸ちゃん（1）を見つめた。

戦争で犠牲になった親族に手を合わせる家族＝23日午前6時36分、糸満市米須の魂魄の塔

どしゃぶりの雨の中、平和の礎に手を合わせる人たち＝23日午前９時25分、糸満市摩文仁の平和祈念公園

沖縄戦犠牲者を悼み、平和を祈る男性＝23日午前7時22分、糸満市米須の魂魄の塔

「平和の火」を見つめる親子＝23日午前5時24分、糸満市摩文仁の平和祈念公園

平和宣言

玉城知事

戦争終結75年の節目を迎えようとする今日、私たちは、忌まわしい戦争の記憶を風化させない、再び同じ過ちを繰り返さない、繰り返させないため、沖縄戦で得た教訓を正しく次世代に伝え、平和を希求する「沖縄のこころ・チムグクル」を世界に発信し、共有することを呼びかけます。

戦後、沖縄県民は人権と自治が抑圧された米軍占領下にある中、先人から大切に受け継がれてきた文化を守り、チムグクルを育みながら、復興と発展の道を力強く歩んできました。

しかしながら戦後75年を経た現在もなお、国土面積の約0・6%に米軍専用施設の約70・3%が集中し、米軍人・軍属等による事件・事故や航空機騒音、PFOS等による水質汚染等の環境問題は、県民生活に多大な影響を及ぼし続けています。

名護市辺野古で進められている新基地建設の場所である辺野古・大浦湾周辺の海は、絶滅危惧種262種を含む530種以上の生物が生息しているホープスポットです。世界自然遺産への登録が待たれるヤンバルの森も生物多様性の宝庫であり、陸と海が連環するこの沖縄の自然体系そのものが私たちウチナーンチュのかけがえのない財産です。

この自然豊かな海や森を次の世代、またその次の世代に残していくために、今を生きる我々世代が未来を見据え、責任を持って考えることが重要です。

県民の平和を希求する「沖縄のこころ」を世界に発信し、国際平和の創造に貢献することを目的として、2001年に創設した沖縄平和賞の第1回受賞者であるペシャワール会の中村哲医師が、昨年の末、アフガニスタンで凶弾に倒れるという突然の悲報がありました。中村先生は人の幸せを「三度のご飯が食べられ、家族が一緒に穏やかに暮らせること」と説き、現地の人々が生きるために河を引き、干からびた大地を緑に変え、武器を農具に持ち換える喜びを身をもって示されました。私たちは、中村先生の「非暴力と無私の奉仕」に共鳴し、その姿から人々が平和に生きることとは何かを学ばせていただきました。

しかし、依然として世界では、地域紛争やテロの脅威にさらされている国や地域があり、貧困、飢餓、差別、人権の抑圧、環境の破壊などの構造的な暴力が横行しています。

さらに、全世界で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、人々の命と生活が脅かされる未曾有の事態にあり、経済活動にも甚大な影響が生じています。この感染症は、病気への恐れが不安を呼び、その不安が差別や偏見を生み出し、社会を分断させるという怖さを秘めています。

だからこそ、命どう宝、生きることの尊さを世界中の人々がそれぞれの立場や違いを認め合い、協力し、信頼し合うことにより、心穏やかで真に豊かな生活を送ることができるよう、国連が提唱するSDGsの推進をはじめとした人間の安全保障の実現に向け、国際社会が一体となって取り組んでいくことが今こそ重要ではないでしょうか。

ここ平和祈念公園には、国籍や人種の別なく戦争で亡くなられた全ての方々の名前を刻む「平和の礎」があります。礎の前で、刻まれた名前をなぞりながら生きていた証を感じ、いつまでも忘れないとの祈りを寄せる御遺族の姿は、私たちの心に深々と染み入ってきます。

平和の広場の中央には、被爆地広島市の「平和の灯」と長崎市の「誓いの火」から分けていただいた火と、沖縄戦最初の米軍の上陸地である座間味村阿嘉島で採取した火を合わせた「平和の火」がともされております。私たちは、人類史上他に類を見ない惨禍を経験されたヒロシマ・ナガサキと平和を願う心を共有し、人類が二度と「黒い雨」や「鉄の暴風」を経験することがないよう、心に「平和の火」をともし、尊い誓いを守り続ける決意を新たにします。

そして今こそ全人類の英知を結集して、核兵器の廃絶、戦争の放棄、恒久平和の確立のため総力をあげてまい進しなければなりません。

此りまでぃに有てーならん戦争因に可惜命、失みそーちゃる命ぬ魂が穏々とうなみしぇーる如、御祈っし、此りから未来ぬ世ねー戦争ぬ無らん弥勒世（平和）招ち、御万人ぬ喜びぬ満ち溢んでぃぬなみしぇーし心底から念願っし、行ちゅる所存やいびーん。

I pray that the souls of those who lost their lives in past wars may rest in peace. I will continue to pray for peace and happiness in the future of mankind.

本日、慰霊の日に当たり、犠牲になられた全てのみ霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、私たちは、戦争を風化させないための道のりを真摯に探り、我が国が非核平和国家としての矜持を持ち、世界の人々と手を取り合い、この島が平和交流の拠点となるべく国際平和の実現に貢献する役割を果たしていくために、全身全霊で取り組んでいく決意をここに宣言します。

2020年6月23日

沖縄県知事　玉城デニー

（うちなーぐち・英語の訳）

これまでの戦争による犠牲になった人々の魂が安らぎあらんことを祈り、これからの人類の未来には平和と喜びあらんことを祈り続けます。

沖縄全戦没者追悼式 平和の詩

沖縄全戦没者追悼式で、高良朱香音さんが朗読する詩の全文を紹介する。

あなたがあの時

沖縄県立首里高等学校3年　高良朱香音

「懐中電灯を消してください」
一つ、また一つ光が消えていく
真っ暗になったその場所は
まだ昼間だというのに
あまりにも暗い
少し湿った空気を感じながら
私はあの時を想像する

あなたがまだ一人で歩けなかったあの時
あなたの兄は人を殺すことを習った
あなたの姉は学校へ行けなくなった

あなたが走れるようになったあの時
あなたが駆け回るはずだった野原は
真っ赤っか　友だちなんて誰もいない

あなたが青春を奪われたあの時
あなたはもうボロボロ
家族もいない　食べ物もない
ただ真っ暗なこの壕の中で
あなたの見た光は、幻となって消えた。

「はい、ではつけていいですよ」
一つ、また一つ光が増えていく
照らされたその場所は
もう真っ暗ではないというのに
あまりにも暗い
体中にじんわりとかく汗を感じながら
私はあの時を想像する

あなたが声を上げて泣かなかったあの時
あなたの母はあなたを殺さずに済んだ
あなたは生き延びた

あなたが少女に白旗を持たせたあの時
彼女は真っ直ぐに旗を掲げた
少女は助かった

ありがとう

あなたがあの時
あの人を助けてくれたおかげで
私は今　ここにいる

あなたがあの時
前を見続けてくれたおかげで
この島は今　ここにある

あなたがあの時
勇気を振り絞って語ってくれたおかげで
私たちは　知った
永遠に解かれることのない戦争の呪いを
決して失われてはいけない平和の尊さを

ありがとう

「頭、気をつけてね」
外の光が私を包む
真っ暗闇のあの中で
あなたが見つめた希望の光
私は消さない　消させない
梅雨晴れの午後の光を感じながら
私は平和な世界を創造する

あなたがあの時
私を見つめたまっすぐな視線
未来に向けた穏やかな横顔を
私は忘れない
平和を求める仲間として

キーワードで知る沖縄戦

皆さんは「学徒隊」や「集団自決」（強制集団死）という言葉を聞いたことがありますか？　漢字が並んで難しそうですが、沖縄戦について学ぶ時によく出てくる大切な言葉です。このページでは沖縄戦を学ぶ上でぜひ知っておいてほしい言葉を五つ紹介します。

学童疎開

1944年７月７日、米軍の攻撃でサイパンの日本軍が壊滅したことをきっかけに、政府は沖縄を含む南西諸島から老人、子ども、女性を九州や台湾へ疎開させることを決定しました。この年の８月22日、多数の学童（小学生）を乗せて那覇から九州へ向かっていた船「対馬丸」が米潜水艦の魚雷攻撃で沈没し、約1500人が亡くなりました。

沖縄戦の前に国民学校（今の小学校）の学童約6000人が家族と離れて熊本や宮崎、大分へ集団疎開しました。疎開した学童たちは受け入れ先の学校内や寺、旅館などで引率者とともに寝泊まりをしました。寒さや空腹、伝染病などで犠牲となる子どももおり、過酷な生活を強いられました。その体験は「ヤーサン（ひもじい）、ヒーサン（寒い）、シカラーサン（寂しい）」という言葉で語られています。

座間味島の病院に入院している子どもたち。米軍の記録では、彼らは親によってのどをかき切られていた。のどや額に包帯が巻かれている（沖縄県公文書館所蔵）

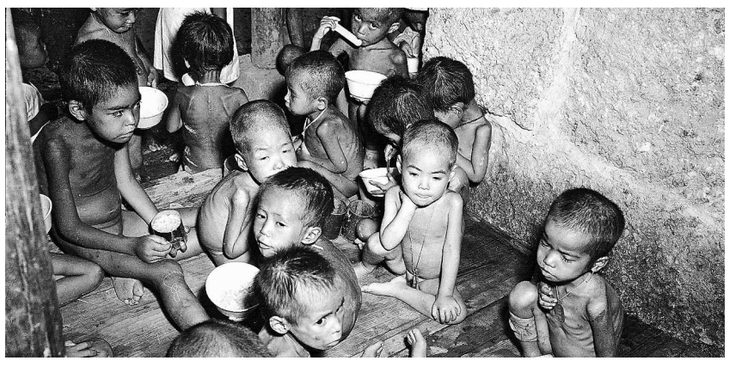
「集団自決」（強制集団死）

米軍が上陸した慶良間の島々や沖縄本島の各地で、住民の「集団自決」（強制集団死）が起きました。手りゅう弾や鎌などで、親子やきょうだい、夫婦らが殺し合い、住民が命を落としました。

沖縄戦が始まる前に、日本軍は陣地造りなどに住民を動員しました。陣地の場所などを知る住民の口から軍の情報が漏れるのを恐れた日本軍は、住民に「捕虜になれば女性は暴行された後に殺され、男性は戦車でひき殺される」「米軍は鬼や獣のようだ」などと伝えて恐怖心を与え、米軍に投降させないようにしました。米軍の上陸でパニックに陥った住民たちは極限状態の中で「集団自決」（強制集団死）に追い込まれました。

日本軍から住民に対し自決命令があったかについてはさまざまな議論があります。しかし、日本軍が住民に捕虜となることを禁じたことや、手りゅう弾が住民に配られたことなど、日本軍の駐留そのものが、自らの命を絶つ選択を住民に強い、誘導する状況をつくり上げたと言えます。

やせ細った子どもたちが集められたコザ孤児院＝1945年８月４日（沖縄県公文書館所蔵）



戦争孤児

米軍は４月の本島上陸直後から、占領した各所に収容所を設け、孤児院や老人施設を併設しました。孤児院は辺土名、田井等、越来、糸満、百名など10カ所にあり、ピーク時には千人余りの子どもがいたといわれていますが、詳しい数は分かっていません。

戦争で親を亡くした子や、逃げる途中で家族とはぐれた子らが収容されていました。その中には自分の名前や住所を言えない赤ちゃんや幼児もいました。栄養失調で衰弱して亡くなる子は後を絶ちませんでした。戦後に琉球政府がまとめた戦争孤児の総数は沖縄本島で3000人に上るとされています。

米軍兵士に話し掛けられる軍服を着た少年たち。米軍の記録では左は18歳、右は20歳となっている（沖縄県公文書館所蔵）

学徒隊

米軍の沖縄上陸が迫る中、日本軍は足りない兵力を補うために沖縄の14～19歳までの生徒を集めて「学徒隊」をつくり、戦闘に参加させました。約1900人（男子約1400人、女子約500人）の生徒が動員され、男子生徒は鉄血勤皇隊や通信隊として、物資を運んだり切断された電話線を直したりする任務につきました。女子生徒は病院壕に配属されて負傷兵の看護を手伝いました。

当時の教育では、天皇や国のために尽くすことが国民の務めと教えられていました。戦争の状況など正確な情報が国民に隠されていました。実際には日本軍が劣勢に立たされているにもかかわらず、多くの生徒たちは日本の勝利を疑わずに戦場へと向かっていきました。

男子学徒隊は全動員数の約半数にあたる816人（教師24人含む）が戦死し、女子学徒隊も202人（教師13人含む）が犠牲になりました。動員数や戦死者数が分からない学校もあります。

膝まで泥に漬かりながら逃げる日本兵。その横には米軍に殺された日本兵が横たわっている（沖縄県公文書館所蔵）

防衛隊

沖縄に配備された日本軍第32軍は兵力不足を補うため、沖縄に住む17～45歳までの男性約２万人を集めて（防衛召集）、兵士として戦闘に参加させました。19歳以上の男性は現役兵としてすでに召集されていたため、兵役につかずに地域に残っていた男性を根こそぎ戦場に動員したのです。

防衛召集の対象は、当時の法律上は17～45歳の男子となっていましたが、数合わせのために45歳を超える人が召集された例もあります。

彼らは「防衛隊」と呼ばれ、弾薬などの物資や負傷兵の運搬や伝令などさまざまな後方任務に当たりました。日本軍による斬り込み作戦に駆り出された人もいます。戦場で危険な任務を与えられた防衛隊の戦死者は約１万3000人に上るとみられています。約６割が戦死したのです。

沖縄戦年表

1931年	満州事変（15年戦争始まる）
1937年	盧溝橋事件（日中全面戦争へ）
1939年	第２次世界大戦始まる
1941年	日本軍がマレー半島に上陸、ハワイ真珠湾を攻撃。アジア・太平洋戦争始まる
1944年３月22日	沖縄などの防衛のため、日本軍が第32軍を創設
５月	日本軍が読谷、嘉手納、伊江島に飛行場の建設を開始
７月７日	多くの県人が暮らすサイパン島が陥落
	政府が南西諸島の子ども、老人、女性を10万人規模で疎開させることを決定
８月22日	疎開する学童らを乗せた対馬丸が米潜水艦に攻撃され沈没
10月10日	米軍が南西諸島を空襲（10・10空襲）。那覇市は家屋の９割が全焼全壊❶
12月14日	日本軍が沖縄県に、子どもや老人、女性らを北部へ疎開させるよう要求
1945年１月20日	日本軍が本土決戦計画を決定。本土決戦の準備が整うまで米軍を沖縄で足止めする作戦が立てられた
３月	県内の中学校21校の生徒が「学徒隊」として戦場に動員
23日	米艦隊が沖縄本島を攻撃
26日	米軍、慶良間諸島に上陸
４月１日	米軍、沖縄本島の読谷、北谷海岸に上陸❷
８日	嘉数高地（現宜野湾市）で日米両軍が攻防戦
16日	米軍、伊江島に上陸。21日に占領
19日	米軍、宜野湾・浦添の防衛線を突破
５月４日	第32軍の総攻撃始まる
５日	日本軍、総攻撃に失敗。沖縄戦の敗北が決定的になる
12日	シュガーローフ（那覇市）の攻防戦
22日	第32軍司令部、首里から摩文仁への撤退を決定
27日	第32軍司令部が首里から南部へ撤退開始
６月22日または23日	牛島満司令官が摩文仁の軍司令部で自決。日本軍の組織的抵抗が終わる
25日	大本営が沖縄作戦の終結を発表
７月２日	米軍が沖縄作戦の終了を宣言
８月６日	広島に原子爆弾が投下される
９日	長崎に原子爆弾が投下される
15日	天皇がラジオで日本の降伏を伝える
９月２日	日本が降伏文書に調印
７日	南西諸島の日本軍が降伏文書に調印

▶詳細はあすの紙面をお読みください